

罰金ごつこ

永代美知代

「母様、只今」

學校の風呂敷包を抱へて、まあちやんは威勢よく、母様のお部屋へ入りました。

「はい、お歸んなさい」

お縫物から、まあちやんの方へお眼をお移しになつた母様は、つい莞爾なさらずにはゐられませんでした。何故と云つて、まあちやんのお顔を御覽なさい。目も口もお鼻も、顔中の道具がみんな踊つてゐるやありませんか、御承知の通り、まあちやんは始終にこついて、何時でも笑ひ度いやうなお顔をした娘です。大抵どんな時だつて、可愛いお口の端へ、針の尖で貫き刺したやうな、小さな細つこいエタボの穴を二つ浮かせて居るのですが、今日はそれが特別製に、まるでるびす様の申兒と云つた容子なのだから堪りませぬ。

「本當にまア、なんてお顔をしてるんでせうねこの兒は……」

母様は呆れたやうに見惚れて被任いしましたが、

「それでも、まあちやんはお幸福なことね、何時でもうれしかつたり、笑ひ度かつたり、好いことばかりで！」

母様はお心から満足さうに、かう被仰いました。

「だつても私、今日學校でね、そりやア、をかあしな事があつたんですもの」

云ひながらまあちやんは、思ひ出しても堪へ切れないうと云つた調子で、身を揉みながら、兩方の手でいっかりお腹を壓へるやうにして笑ひ初めました。

「ホ、ホ、餘程可笑しかつたと見えるのね」

「だつてね母様、木村先生つたら、まあちやんが、十二月の一日はまあちやんの誕生日ですつて云つたらばね、まあちやんつて誰方ですかつて、お訊きなさるんですもの、もう、をかしくつて……」

「だつて木村先生つて、こんど新らしくお見えになつ

た先生(せんせい)なんでもせう、だからまあちゃんつて、あなたの名前(なまえ)つて事を御存(ごぞん)じないんでせう」

「否(いな)、御存(ごぞん)じなのよ。だつて皆(みな)さんがまあちゃんまあちゃんつてお呼び(よび)になるんですもの、先生(せんせい)だつて、めつたに森山(もりやま)さんつてお呼び(よび)にならないのよ」

「だつて、まさかまあちゃん、御自分(ごじぶん)の事をまあちゃんだなんて申(まを)上げやうと、お思(おも)ひつきにならなかつたんでせうよ」

「さうね。だつてもね母様(かあさま)、みなさんがをかしがつてね、一度(いちど)に吹き出(ふ)したもんだから、教室(けうしつ)つたら、まるで破(やぶ)れるやうな騒(さわ)ぎだつたことよ」

「さうかい」
母様(かあさま)は何故(なにゆゑ)だか笑(わら)ひもなさらず、黙(だま)つてお了(しま)ひなさいました、やがて、

「松枝(まつえ)さん」
と斯(か)うお呼び(よび)掛け(か)になつたお聲(こゑ)は改(あらた)まつて、まあちゃんと思(おも)はずハツと致(いた)しました。

ア、今(いま)つから初(はじ)めませうね」

「え、屹度(きつと)！」

まあちゃん松枝(まつえ)さんは一生懸命(しやうけんめい)をつけて、一寸(いちずん)と口(くち)を利(き)くにも、一度(いちど)お胸(むね)の中で、ちやんとおけいこをしてから利(き)くやうに致(いた)しました。

母様(かあさま)も何(なに)だか澄(す)ましたお顔(かほ)をなすつて、ふだん程(ほど)まあちゃんとお話(わなし)をなさいません、夕方(ゆふがた)父様(ちちさま)が役所(やくしよ)からお歸(かへ)りになりました、罰金(ばつぎん)一件(いけん)を申(まを)上げますと、父様(ちちさま)も直(す)ぐ大賛成(だいさんせい)をなさいました。

「丁度(ちやうど)好(よ)い！今晚(こんばん)は久(ひさ)し振り(ぶり)で本郷(ほんかう)の伯父様(おぢさま)が被(おこ)入(こ)やる筈(はず)だからね、松枝(まつえ)さんはすつくり大人(おとな)らしくなつて、あまつたれだなんて云(い)はれるんぢやないよ」

斯(か)う父様(ちちさま)が被(おこ)仰(おほ)ると、母様(かあさま)は急(きよ)にお立(た)ちかけになりまして。

「そいぢや、御一箱(ごいっしやう)に御飯(ごはん)を召(め)上げるんでせうね」
「ナニ、出(で)來(き)合(あ)ひで澤山(たくさん)だよ、久(ひさ)し振り(ぶり)に會食(くわいじき)するのが樂(たの)みなんだから、何(なに)も御馳走(ごちそう)なんかなくつ



まあちゃん一人(ひとり)つ兒(こ)なものですから、父様(ちちさま)からも母様(かあさま)からも、ついぞこれまで松枝(まつえ)さんと云(い)つて呼び(よび)かけられた事は、一度(いちど)もありませんでした。

「松枝(まつえ)さん、あなたもね、もう直(ち)ぐこの一日(いちにち)が來(き)ると、まる十歳(じゆっさい)になるんでせう、だから何時(いつ)までも赤(あか)さんのやうなお口(くち)を利(き)いてはいけません。母様(かあさま)はこれから屹度(きつと)あなたを松枝(まつえ)さんと呼び(よび)ますからね、あなたもその積(つみ)で、自分の事(じぶんのこと)は、松枝(まつえ)とか私(わたし)とか云(い)はなくつちやなりませんよ」

「え、そいぢや私(わたし)、これから決(き)してまあちゃんて云(い)ひませんわ」

「云(い)つたら罰金(ばつぎん)ごつこにしませうね、母様(かあさま)が間違(まちが)つたら、その度(たび)十錢(じゆせん)づゝあげますわ、その代(か)り、若(わか)しあなたの間違(まちが)つたら、一度(いちど)五十錢(ごじゆせん)の罰金(ばつぎん)ですよ、ね、よくつて？」

「え、え、よござんすとも！私(わたし)一圓(いちえん)づゝ出(だ)しますわ」

「オヤオヤ大變(たいへん)なのね、そいぢや屹度(きつと)ですよ、サ



ても可(か)いサ」

「だつて何か、些少(ちやうせう)と見(み)つくろつて見(み)ませうよ」
眞白(ましろ)いエプロンをお掛(か)けになつた母様(かあさま)は、梅(うめ)や魚屋(いさなや)へお走(は)せになつたり、御自分(ごじぶん)で瓦(が)斯(す)をおもしになつたり、臺所(だいどころ)でお忙(いそ)がしくなすつて被(おこ)入(こ)います。

「母様(かあさま)、私(わたし)にも何か手傳(てつた)はせて頂戴(ちやうだい)な」
まあちゃんが一角(ひしやく)お手傳(てつた)するつもりか何かでたすきがけであるのを御覽(ごらん)になつた母様(かあさま)は、可笑(わか)しくなりました。

「オヤ、どうも！そいぢやね、おか、でもかいて貰(もら)ひませうかねえ、だけども指(ゆび)を削(け)るといけな

いねえ」
「大丈夫(だいじやうぶ)よ母様(かあさま)！」

「そいぢや用心(用心)してね」
不安(ふあん)らしい御容子(ごようす)をなさりながら、母様(かあさま)が渡(わた)して下(くだ)すつたおか、削(け)を受(う)取(と)つて、まあちゃんは母(はは)精(せい)に削(け)り初(はじ)めました。細(こま)かい淡桃色(たんとうしき)の、美(うつく)しい花(はな)

も



のやうなのが段々澤山にたまつて來ました。
「ねえ母様、ちよいと母様、この位な細かさで好いこ
と？」

まあちやんは自慢が
てら。母様を呼び掛け
ました。母様は丁度オ
ブンの火加減を御覽に
なつてゐる處だもので
すから、それ處ではあ
りません。まあちやん
に背をお向けになつた
まよ。

「あゝ可いでせうよ」
「アラ母様つたら随分
だわ、ちよつと御覽な
すつて頂戴つたら」

「ドレ」母様は一寸此方を御向きになりましたが、
「あゝもう澤山、どうもありがたうよ」と被仰つたき



り、又オブンの方を氣にして被在います。
「ね母様つたら、もつと何か御用はなくなつて？」

「もう澤山！あなた
はもう彼方へ行つて
らつしやいよ」
「だつて母様、あの
お皿洗ふんでせう」
「否、破るといけな
いから駄目」
「ぢやあ、そつちの
お鍋は？」
「およしなさいつた
ら」
「そいぢや母様、ね
母様つたら、何か御

用があるでせう」
「無いから駄目だつては、うるさいねえちやん！」
母様は思はず失敗つてお終ひでした。

「アラ母様！罰金々々！ね、十銭頂戴！」

「ホ、ホ、本當にこの兒は……」

母様は苦笑ひをなさりながら帯の間からお財布をお
出しになりました。そしてまあちやんに十銭の銀貨を
お拂ひなさいました。まあちやんはをかしくつて、母
様を負かしたと思ふと、身内の血がぞくぞくする程う
れしいやうな氣もするのです。

と急にお座敷の方が騒々しくなりました。

「オヤもう伯父様が被入つたのかしら？」

斯う思つて、まあちやんが聞耳を立てますと、丁度

その時お座敷から父様のお聲です。

「オイお茶を持つといで！」

「ハイ只今！」

母様はいきなり斯う御返事をなさいましたが、先刻
御用意をなすつてお置きになつた筈の菓子器が見當り
ません。

「オヤどうしたんだらうね、菓子器が無い」

「アラ母様、菓子器ならまあちやんが先刻此方へ取り

ましたわ」

周章て、云つたまあちやんは、今更自分のお口に手
を當てました。

「ホ、ホ、今度は一圓、母様はお陰で大儲けだねえ」
忙しい中から二人は顔を見合せて笑ひました。

